

第5部 自づく⑤

# 島の心結ぶ石積み

程度が残るだ。利用の面で不便だった。え、全住民に家族のよう  
 地では当たり前すぎた。た。表情に悔しさをに  
 化価値も分からず、磁きな結びつきをもちらして  
 もあり、土地 築えが進んだ」と振り返る。いる」と分析する。

練堀の減少にストップ。森保教授や学生の熱心  
 を掛けたのは、島外の平さに触発され、島民も動  
 者の言葉だった。広島工 始めた。今年二、三月  
 業大（広島市佐伯区）環に、大規模な修復作業を  
 境学部の森保洋之教授 展開。二十六日間で島民  
 (63)だ。二〇〇一年夏、を中心に延べ約二百五十  
 都市住宅学会のメンバーが参加。二ノのしづく  
 らと島を視察。帰り際、いを使って、長さ二百六  
 見送りの島民に呼び掛け 十層のくすんだ練堀を明  
 た。「日本全体で薄れて るくよみがえらせた。  
 いる集落の共有意識がこ 指導役を担った左官歴  
 こにはある。練堀がそれ 五十年の田原万治さん  
 を物語っている。この島 (64)と提案者の橋部さん  
 は宝の島だ」  
 が、修復から半年になる  
 練堀の前に立った。「み  
 んなで作業したから、共  
 有する思いも強まった感  
 有する思いも強まった感  
 じがする」と田原さん。

## □島民自ら修復

森保教授は同牛秋から 祝島の研究に着手。年に 橋部さんも言った。「練  
 敷回、島を訪ねては練堀 堀は祝島の風情だ。これ  
 の配置やタイプを調べて 以上減らしたくないよ  
 いる。「二ノの練堀は民 家固有でなく、路地に沿  
 って連なるのが特徴。集 別をいとおしもうと見づ  
 落全体を一つの屋敷に愛 めた。



二ノに塗り直したしづくいが白く輝く練堀を  
 る田原さんと橋部さん